

2025（令和7）年度沖縄県若年性認知症支援推進事業 若年性認知症本人交流会・本人ミーティング「同士会」 報告書

日時：2025年9月25日（木）12:00～16:00

場所：豊見城市 飲食店

参加者：合計12名 本人4名+ゲスト1名（65歳）、支援者2名、行政2名（県・市）、
リサーチ会社1名、家族1名+ゲスト1名（65歳以上）、

目的：若年性認知症の本人同士が自らの体験や希望、必要としている事を語り合い、自分達の
これからのよりよい暮らし、暮らしやすい地域のあり方を一緒に話し合う場づくりを目指す。

今回は、県事業で実施予定の認知症バリアフリーについてのアンケート最終調整と、若年性認知症本人の実態や課題の共有を目的に開催されました。以下に当日の話題を項目ごとに分類し報告します。

【就労】本人からは、発症後も働きたい思いが強い一方で、会社や同僚に十分理解されずに居づらくなった経験が語られました。営業職から配置転換された事例、障害者雇用枠を希望しても年齢的に不利との声、支援員がいなければ継続は難しいという実情の報告がありました。職場理解を深めるためには、専門員やジョブコーチの介入が不可欠であるとの意見で一致しました。

【移動・外出】沖縄特有の交通事情から、路線バスの乗継ぎや定時性の不安、免許返納後の移動困難が大きな課題として挙がりました。通院にタクシーを利用すると往復で3,000円を超える場合もあり、余暇の外出には使いづらいとの本音が語られました。また、視空間認知機能低下の影響で階段や横断歩道が怖く見える、速度感到過敏になるといった体験も紹介されました。移動支援制度の整備や免許返納の時期判断を支えるガイド、代替交通手段の提示が欲しいとの声がありました。

【日常生活】買物・金銭管理・料理・家事などに困難を感じている人が多く、個々の特性によって支障の内容が異なること。例として、金属フォークの舌への感触が苦手になり食事が難しくなるなど、感覚過敏の影響が報告されました。

【サービス利用・居場所】デイサービス利用経験者からは、年齢層の違いにより居場所感を得にくいとの意見が出ました。就労継続支援A/Bは疾患像に合わない場合がある一方、同士会や本人ミーティングは「ここでしか話せない」場との高い評価がありました。仲間と安心して話せる同士の会の重要性が確認されました。

【交流・理解不足】外出頻度には幅があり、受診や月に一度の交流会程度にとどまる方もいれば、就労していて二、三日に一度は外出する方もいます。一方で、交流会がなければほとんど外出できていない方も少なくありません。したがって、外出機会を確保するためにも、交流会の場が複数あり、しかも身近な地域に存在することが望まれます。また、偏見というより理解不足によって交流が途絶えてしまうことがあるとの指摘もありました。「一言の誤解で会いたくなくなる」という声に象徴されるように、周囲の理解促進は欠かせません。

【情報収集】 スマホやインターネット、テレビ、新聞、ラジオなど、多様な手段が活用されており、対象に応じた複数の媒体での情報発信が求められました。

【行政・地域への希望】

1. 医療・買物・交流を対象とした移動支援制度創設
2. 中小企業向けの就労両立支援パッケージ整備
3. 免許返納支援（判断ガイド、代替交通の提示）
4. 本人の近隣に交流拠点がが増えて欲しい。
5. 本人の声を活かした理解促進教材の整備

【まとめ】 就労は支援員同行が不可欠であり、移動は免許返納後の支援が急務である。日常生活には個別差が大きく、本人交流会”同志会”は「ここでしか話せない」場として重要な役割を果たしている。行政への要望は、移動支援と就労両立支援を中心に整理された。今回の当事者の意見を基に、今後行われる県のアンケートに反映していくことを期待します。

【次回予定】 原則：毎月第4水曜開催。場所は豊見城市内 飲食店の予定。



以上